

おかげさまで 「広報なりた」1000号

市民のみなさんと 市政を結んで半世紀

市制施行から間もない、昭和29年5月1日、「成田市政だより」として創刊した広報紙も本号で1000号を迎えました。

広報紙は、市民のみなさんと市政を結ぶ架け橋であるとともに、成田市の歩みを記録した貴重な歴史資料でもあります。紙面をたどれば、大きく発展してきた成田の歴史を一目で見ることができます。懐かしい人、忘れられない出来事、珍しい写真や記事。それら一つひとつが、当時の様子を鮮明に映し出しています。

今回は、そのときどきの広報紙に掲載された懐かしい写真や関係された人たちのお話で、半世紀に及ぶ本紙の歴史を振り返ってみました。

今後ともよりいっそう読みやすく、親しまれる紙面づくりを目指して努力していきますので、ご愛読のほどお願いします。

昭和29～30年代



昭和29年7月6日～10日まで祇園祭に合わせて行われた市制祝賀式典。6日夜、提灯を持って国鉄成田駅前に押し寄せた市民を、「火の海と化した提灯行列」と伝えています（昭和29年8月10日：第4号）

昭和29年5月1日に発行された「成田市政だより」創刊号。1000号への道もここからスタート



「広報なりた」で振り返る半世紀



昭和38年11月、東日本で初の玉作工房址の発掘に歓声をあげる調査団。「北総の古代史に新たな1ページ」と新聞で大きく取り上げられ、連日マスコミ関係者や地元見学者が大勢訪れました（平成5年12月1日号：第776号「シリーズ成田市40年 掲載」）



市庁舎落成・市制5周年記念の花自動車パレード（昭和33年11月20日：第57号）



昭和39年10月アジアで初めて開かれた東京オリンピック。10月6日には聖火リレーが成田に到着、市内8ヵ所で聖火リレーが引き継がれました（昭和39年10月30日：第129号）

【広報1000号略史】

昭和

- 29年5月 成田市政だより」創刊（タブロイド版2ページ・毎月1回発行・発行部数1万部）
- 41年4月（144号）タブロイド版からB5版に変更。広報紙の顔となる表紙写真が登場
- 44年4月（182号）月1回から月2回の発行に増刊（印旛郡市で最初）新聞折り込み開始
- 46年4月（230号）広報の題字が「成田市政だより」から「広報なりた」に変わる
- 58年7月（526号）「ジュニア広報」が創刊。B4変形版、2色刷り2ページで発行
- 63年4月（640号）大きい紙面と活字、優しい紙面づくりを目指し、B5版からA4版へ。「編集後記」が毎号登場

平成

- 8年4月（832号）広報広聴課から広報課へ。表紙、紙面づくりを刷新。1日号が2色刷りに
- 13年6月（956号）紙面をリニューアル。15日号は14年1月から2色刷りに。広報紙を市のホームページで全ページ見ることができるようになる

昭和40～50年代



昭和43年2月26日、3月10日の2度にわたる、市役所前での新東京国際空港建設阻止大集会。「市街戦さながらの乱闘を繰り返し、多数の重軽傷者をだす惨事」と伝えていきます（昭和43年4月10日：第170号）

昭和43年3月、国鉄（現JR）千葉成田間が電化。48年には成田我孫子間、49年には成田銚子間が相次いで電化となり、輸送力は飛躍的にアップしました（昭和43年4月10日：第170号）



昭和43年1月・2月、甚兵衛大橋・長豊橋が開通。十数年にわたる住民の願いがかない「夢の架け橋」といわれました。写真は甚兵衛大橋の渡り初め式（昭和43年3月1日：第169号）



昭和46年4月、広報の題字が「成田市政だより」から「広報なりた」に変わりました（昭和46年4月1日：第230号）



昭和47年建設途上の成田ニュータウンの中高層住宅。最初の入居は、46年中台の公務員住宅でしたが、市街地へ出るアクセスがとて不便で「陸の孤島」と呼ばれました。当時、この地区に限り広報紙は職員が直接配達しました（昭和47年3月15日：253号）



昭和53年5月22日、成田空港開港。成田発日本航空第1便に搭乗する乗客の列（昭和53年12月15日：第417号）

昭和59年10月、市制施行30周年を記念し、「成田祭り」を開催。国際文化会館では、ダークダックス・水前寺清子さんをゲストに「NHKのど自慢」が開催されました（昭和59年11月1日：第558号）



昭和60～平成時代



昭和63年9月、国際文化会館で成田市・咸陽市の友好都市締結の調印式。この締結によって成田市は、国際空港都市への第一歩を踏み出しました（昭和63年10月1日：第652号）



昭和61年3月に完成したJR成田駅西口広場。区画整理事業により、団護台・馬橋・新町地区が生まれ変わり、ニュータウンとJR成田駅が直結しました（平成6年10月1日：第796号「シリーズ成田市40年 掲載」）



平成2年8月、成田高校が35年ぶり6度目の甲子園出場。都城高校（宮崎県）と対戦、6対2で勝ち、38年ぶりに校歌が流れました（平成2年8月15日：第697号）



平成9年に全国広報コンクールで3席に入賞した広報なりました。平成8年に続く2年連続全国入賞。その後も平成13・14年と千葉県広報コンクールで第1位に輝きました（平成9年11月1日：第870号）



市民編集員を募集して、読者の視点で作成した特集「市民編集版」。ごみ、水、地震災害などの身近な問題を分かりやすく取り上げました（平成10年3月10日特集号、11年3月5日特集号、12年1月15日特集号）

平成14年4月18日、成田空港の2本目の滑走路となる暫定平行滑走路がオープンしました。今後国内線の充実と空港アクセスの整備など地域経済の活性化に期待が寄せられています（平成14年4月15日：第977号）



荒井さん一家が登場したごみ特集（平成13年8月1日：第960号）

市民レポーターとして、ごみ分別の様子を見学したり、スーパードでの取り組みの話や聞いた、普段できない貴重な体験でした。

広報紙が発行されたときの周囲の反響はかなりのもので、広報紙を見ている人が多いことを実感しました。実家に送ったり、子どもたちの記念にもなりました。

広報紙から情報を得ることは多いですよ。これからも読みやすく、分かりやすい広報紙づくりをお願いします。



周囲の反響は
かなりものでした

荒井知子さん（郷部）

広報で語る

見つめてきたお二人にお話を伺いました

市政をより身近に、PRの大切さを学びました



石井重治さん

成田市に空港建設の閣議決定がされ開港するまでの期間（昭和41年～53年）は、成田が最も揺れ動いた時代。この時代に広報業務に携わった石井さんに、激動の市政を当時の仕事から振り返っていただきました。

昭和29年に創刊された「成田市政だより」は、44年4月には月2回の発行なり、新聞折り込みによる配布も始まりました。また、46年4月には「広報なりた」と改題し、より一層の紙面の充実を図るため、市役所の各課に「広報主任者」を置き、円滑な出稿体制を整えるようにしました。

こうした背景には、41年7月に新東京国際空港建設が閣議決定され、以後市域および市民生活に与えた大きな影響がありました。

広報担当となった43年は、空港をめぐって地権者、条件賛成派と政府首脳との会談、市長の国への陳情・要望、反対派の人々の集会などが頻繁にあり、3月市役所前で行われた「空港建設阻止大会」では、反対同盟・金字連と警官隊

が衝突し流血の惨事となった事件は、忘れることができません。

44年には空港の建設工事や成田ニュータウン計画（人口6万人、小学校8、中学校4、保育所4、高校2の設置）の造成が始まり、46～47年には、こうした施設や地区センター・公務員住宅・県営住宅・日航寮、加えて押畑の市総合グラウンド、市営青果市場、消防分署などの建設ラッシュで掲載記事が急増しました。

また、市政をより身近に感じ、理解してもらうために、44年から市内施設見学会を実施しました。新たに建設された施設を直接市民のみなさんに見ていただくことを考えたのです。まさに「百聞は一見に如かず」でした。48年には市政ガイドブック「市民のしおり」を

全戸配布。成田の移り変わりが一目で分かる「ふるさと写真展」を開催し、好評を得ました。

空港問題では、市議会もしばしば深夜議会となりました。48年から49年にかけての航空燃料のバイブライン建設問題、50年の航空機騒音シリーズ、51年の交通アクセス対策、52年の空港に関する45項目の要望に対する国の回答など、特集を組んで掲載しました。

これ以降、行政の制度を紹介する広報記事も増大し、成田国際文化会館がオープンした50年には「広報なりた」の形も定まってきました。少人数のスタッフでしたが、51年度の県広報コンクールでは第1位、全国で9席に入選しました。成田の広報が全国でも認められたのだと素直に喜びました。

激動する市政の広報マンとして常に心掛けたことは、PR（パブリックリレーションズ）の理念を追求することでした。

かなり以前、「知らしむべからず、依らしむべし」というのが住民に対する役所の対応でした。しかし、現在は違います。行政と広報は楯の表裏の役割をもっています。市の行政について市民にお知らせすることはもちろんですが、

「上意下達」ではなく、住民の意思を吸い上げ、共に考え、共に実現するという広報広聴の役割が求められています。46年には、成田ロータリークラブから「PR」についての講演依頼があり、その根源と重要性のお話をして、記念に花瓶をいただきました。広報業務に携わった思い出の品として、今でも大切にしています。



全国広報コンクールで初めて入賞した作品
（昭和51年11月1日：第365号）

激動の市政を

創刊号から現在までの広報紙、そして成田を

「時代の出来事を記録することは、自分の生きた時代しかできないことだと思っていた」と語る郷土史家・川辺さん。

昭和60年7月から連載された『歳月の忘れ物』。そこに掲載された資料の一部は、古物商をしていたある人からの電話がきっかけで手に入れたものでした。

「昭和30年代も後半、倉庫の中を整理するから見に来ないかと電話をもらいましてね。山積みになった古新聞や雑誌の中に、旧役場の資料や成田に関係するものが数多く見つかりました。大変なものを発見したと思いましたが、それから毎日古物商に通い、夜遅くまで探しました。そして自分が生まれた成田町関係の資料だけは買って、家に持ち帰りました」と当

時を振り返ります。

「市から広報紙には読みのないページが少なく、成田の歴史を紹介してほしいと相談があり引き受けたのが『歳月の忘れ物』です。」

ところが連載を始める段になって、資料はあっても写真がない、写真はあっても資料が見つからない。だから再度資料の収集や整理を始め、市内中歩き回りました。

広報紙は、紙面に制約があるので、文字量や掲載写真の点数が限られます。このシリーズは、多くの人の協力と資料の提供、励ましがあつたからこそ続けられたものです。掲載できなかった写真や資料が今でも残っています。それがとても残念でした」とタンボールからアルバムを取り出すと、

「50年後の成田を語るために、今とこれからの成田の姿を残してほしいです」と言う川辺さんは、8年前に病気を患って、最近では外を歩くことが少なくなりました。しかし、ズボンのポケットには今でもカメラが入っています。その情熱は昔と少しも変わっていないようです。

写真を撮りきれないほど、まちの変ぼうが急でした

川辺春光さん

市民のみなさんから読みこたえのある記事として人気を博したシリーズ『目で見る歴史散歩』『歳月の忘れ物』の執筆者。実に9年3カ月（合計111回）にわたり、成田の移り変わりや人々の生活の様子などを紹介しました。



昭和60年7月から100回連載した歳月の忘れ物。平成6年に成田市制施行40周年記念として1冊の本として発行された